

淨土

1978-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別送達郵便物) 第三二五号
昭和五十三年十月二十五日印刷 昭和五十三年十一月一日発行
第四十四卷 第十一号



嫁と姑

近時、日本古来の伝統的な「家」の概念がくずれ、特に都会では「核家族」と称して、夫婦と子供のみという家庭成立の最少限度の人々の集りが増加している。その原因の一つに、嫁・姑の問題がある場合が多いが、仏典の中の『ジャータカ(本生譚)』にも嫁の姑いじめの物語が散見される。

昔、舍衛城に行いの正しい一人の若者が住んでいた。父が亡くなったあと、よく母に仕え、顔や足を洗ってやり、水浴をさせ、粥などの食事を作って、世話をしていた。或る時母は息子に、家業の他に私のめんどろをみるのはたいへんなことであるからとして、嫁を



もらうことをすすめ、息子が、私は母上の世話をし、亡くなられたあとは出家をいたしますというのをおしきって或る娘を嫁に迎えた。嫁は、私の夫はまごころをもって母にかしずいている、私も同じように仕えなければいけないと思い、よく母の世話をしていた。息子は息子で、私の嫁はよく母に仕えてくれると喜んで、美味なる食べ物を嫁に与えていた。ところが嫁は、夫が自分に美味なる食べ物を与えてくれるのは、姑より私が愛しく、あんに姑を追い出そうとしているものと誤解し、姑に種々のむごい仕打ちをするようになった。粥を与えるのにも、熱過ぎたり、冷過ぎたり、塩辛過ぎたり、全く味気無くしたりして、姑が粥が熱くて塩辛いという、なみなみと冷たい水をそそぎ、それでは冷たくて塩気がないという、と、先程までは熱くて塩辛いいいながら今度は反対をいう、と大声でののしり、水浴の際も、故意に熱い湯を背にそそぎかけ、背が焼けそうだと悲鳴をあげると冷たい水をかけ、余りに冷たいという、と、又、先程とちがってわがままをいう、などことごとくに姑を手荒くとり扱うようになった。

姑は悲しんで、この世の中の正しい法は滅んでしまったのであろうといいながら家を出てしまった。しかし息子は嫁に、母は年老いてよるべもない、お前は年も若くいずこに行つても暮しがたてられるから自由にしてくれといい、嫁も誤解をあやまって以前の如く、よく姑のめんどろを見るようになった。

インドの家族制度はその昔からいわゆる大家族制で、一族の父母、祖父母、伯父伯母などが一つ屋根の下で暮す風習があったから、これらの物語は極端な嫁姑の争いとも思えるが、今から二千年以上も前から同様の問題があったことが知られる。人間は感情の動物であるといわれる。余程の達人でなければ心を自由に制御することは難かしい。ブツダは、シャカ族とコーリヤ族がローヒニー河の水を争った折も、コーサラ国のヴィドゥーダバ王がシャカ族の非礼を怒って軍を進めて来た時も、争いを止める努力をされている。古い言葉ではあるが心を修め、身を修め、家庭を円満にして行くことが、国の平和を保って行くことの基本となると述べた先哲の心を、我々は今一度思い興してみたい。(佐藤良純)

十一月号



ときとき別時の念仏を修し
て、心をも身をもはげまし
ととのへすすむへき也

——『七箇条の起請文』

目次

法話

お地藏さま・観音さま——母を偲んで ……………上 田 見 宥……(2)

平安朝にみる老の運命……………曾 田 文 雄……(7)

特別寄稿

ある念仏者のアメリカ抑留生活記(上)……窪 川 信 丈……(12)

〈新連載〉 善導大師の生涯とその教え(1)

善導大師と法然上人……………(18)

御名を唱える!

インドの古典『バアーガヴァタ・プラーナ』より…小 山 典 勇……(24)

江戸後期の宗門歌人

良洗上人の研究(二)……………吉 田 光 覚……(32)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(22)

〈読者の声〉信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(二)……………吉 村 孝……(29)

〈表紙裏・巻頭言〉 嫁と姑……………佐 藤 良 純

念仏ひじり三国志⑤ ——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



お地蔵さま・観音さま

—母を偲んで—

上^{うえ}田^だ見^{けん}宥^{ゆう}

(大阪・住吉区宝樹寺住職)

(一)

ほろほろと鳴く山鳥の声聞けば

父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ

(行基菩薩)

秋も半ばを過ぎると両親の命日が訪れる。父が身罷って二十八年、母は満三年になる。両親を見送った今となって振返ると、過ぎ去った年月はまことに早い。父は五十五歳で亡くなったが、いつの間にか自分もあと五年でその年齢^{とし}になる。世間でよく、私もお蔭で身体の調子もよく、親より〇年長生きしています、といった言葉を聞くが、厚生省発表の平均寿命はどうあれ、男は父親、女は母親の亡くなった年齢^{とし}が、どうも深い感慨をもって迎えられることになっているようである。しかし、諸行は無常、五年はおろか、明日が元気だという保証もない人生であるが、やはりせめてものこと、父の年齢^{とし}を越えることが先ずは当面の望みである。

父は比較的若くして亡くなったので、これという孝養をした憶えもない。さればといって、その分まで加え、父より四半世紀も長生きした母に、どれ程尽したかと自問すれば、これまた面目ない日々であったと答えるしかない私である。

(二)

それは秋のお彼岸入りの日であった。母は高血圧の発作で倒れた。以前にも一度発作があつて二、三日眠り続けたことがあつたが、有難いことに何の後遺症もなく全快した。それからずっと内科や眼科の治療を受けてきて約十年、今度の症状は素人目にも良くなかつた。

襖の縁にとり縫つたがこらえ切れなかつたのであろう。襖が二枚、敷居からはずれて、その側にかがみ込むように倒れていた。急に苦しくなつて誰かを呼びたかつたであらうが、生憎く家の者がそれぞれ外出して、留守番中の出来ごとであつた。檀家への参詣から帰つた私が先ず見つけた。朝の食事も元気に済ませ、別にどうということもなかつたのに、両の眼は左上の方へひきつれ、半身は不随になつてゐる。来診してくれた医師は、先ず足の裏を擦つてみたが何の反応もない。反応を示さないということは神経が麻痺しているからであらう。「これは大分悪いなあ」と医師は血圧を計り注射をして、暫く様子を見るしかないと言う。これは大変なことになつた——それが正直な想いであつた。高血圧の持病がある限り、いずれはこの日が来るといふ恐れはあつたが、現実のものとなつてみると、言いようのない不安と戸惑いがあつた。このまま落着いて良くなるのか、或いは中風で永く寝込んでしまうのであろうか。

昼か夜かわからぬ看病が始まつたが、三日目位であらうか、医師が病院へ入れた方が良いと言う。この病気は絶対安静が昔からの常識である。だが今日の医学は進歩しているから大丈夫、自動車も静かに運ぶし、

検査をすれば脳内の出血場所やその状況もわかるから、適切な処置ができる。このままでは治る病気も治らぬと仰言るのである。

病人を動かすことに躊躇する私たちに、医師は毎日の往診のたびに決断を迫った。だが一方では、こんな病人を入院させるなんて飛んでもない、お家の皆さんで暖かく介抱してあげて下さいよ、という声も聞えてくる。医師の言葉が非難めいてくるように思うのも、こちらの僻みひがみであろう。こんな板ばさみは実にたまらないものである。やっと決心をして入院させたが、精密検査の結果は、出血の場所が悪く回復の見込みなし、との宣告であつた。そして発作で倒れてより三週間、昏々と眠りつづけ、一度も意識をとり戻すこともないままに、母は七十六歳の生涯を閉じた。

(三)

いささか前おきが長くなり過ぎたが、これも釈尊のいわれた四苦(生老病死)の実際を示す一例としてお許しをねがいたい。そして私は、わずか三週間の看病ではあつたが、その間に平生では得難い法味を又一つ頂戴したことを感謝している。それは母の寝間着などを取替えているとき、否応なしに乳房が眼に入るのである。こんなにつくづく眺めるのは何十年振りであろう。もう年老いてお世辞にも立派なものとは言えないし、まるで洗濯板に乾葡萄である。けれども私はこの乳房にすがって育てられた。私だけではない、四人の子供を育てた乳房である。長男は幼くして亡くなり、次の兄は戦死した。今残っているのは看病に駆けつけてくれた姉と、三男である私の一人だけであるが、いずれにせよ、子供を育てるのは並大抵のことではない。乾葡萄のような胸も、老いてそうだったのでなく、子供たちに乳をふくませ、栄養を吸いとられて萎びてしまったのではないか。又、子供を生めば齒も弱ると聞いている。実に母は、子供のために身体を張っ

て生きてきた一生を今終ろうとしているのである。

私は、母がお地藏さまのように思えてきた。仏教辞典的な難しいことはどうあれ、お地藏さまとは、文字どおり大地の蔵である。大地はあらゆるものの基本であり、お育ての原点である。太陽や水とともに大地の恵みがあつてこそ、全ての動植物が生成発展されてきた。謂わば生命の親である。そして又、大地は浄・穢ひとしく摂め取って厭うてくださらぬ。どんな汚物であろうとも、いつの程にか影も形もとどめぬまでに浄化して、しかも元の静寂である。母の愛も同様ではないか。その愛をうけることなしに今日の私はない。この世に生を享ける以前、既に胎内から貰い続けてきた親心である。いや、親子となる因縁には、無始よりの慈しみがあつたのではなからうか。育てて代償を求めるわけでもなく、世間が相手にせぬ悪人・愚者でも、親は胸に抱きとめてお見捨てにはならないのである。

蔵も同じくお育ての蔵である。どのような立派な宝物も、わが子のためには惜しくはない。物心ともに無尽蔵のお与えである。今思えば、あの戦争中、母が居なければ餓死していたかも知れぬ私である。自分の着物を米に換え、遠近馳けまわつてのお養いは、まさしくご馳走であつた。たとい自分は空腹くても、子供たちの喜ぶ顔を見て満足して下さるのである。

十億の人に十億の母あれど

わが母にまさる母あらめやも

(曉鳥 敏)

この歌のとおり、子供にとって母は菩薩である。お地藏さまに擬えるのは不敬の至りであるが、私の母だけでなく、十億の母があれば十億のお地藏さまが在しますのである。それを考えると、親は十人の子を養えど、十人の子が一人の親を養えぬ、とのみ教えが胸につき刺って悲しい今日の世相である。

母は又、よく観音さまにも例えられる。慈母観世音というように、観音さまのお慈悲にも似た母の心を表現したものであろう。ほんの一例ではあるが、戦場に行った兄の写真に、毎日陰膳かげぜんをしていた母の姿を、私はつい昨日のことのように思い出す。いま頃お腹をすかしていないだろうか、どうか無事でいてくれますように、それは母なればこそその切ない祈りであり合掌である。だからこそ、兵士は「お母さん」と叫んで戦死していったのであろう。自分の手で介抱することも叶わず、育て上げた子供が先立っていくことは何とも残酷である。戦争も末期、空襲警報のたびに、別製の袋に兄の位牌を入れて肩から吊り下げ、肌身から離さなかった母の心情を、私は今に尊く偲んでいる。

世の母みな観世音花の春

(杉野自得)

(四)

母のことを俗に、お袋と言う。まことに至言である。世の母はそれぞれの袋にわが子を暖く包み、護り育てて下さる。それは、お地藏さまや観音さまのように衆生全体を対象した大きな袋と較べて、わが子だけの為の小さな袋かも知れない。しかし、その袋が私の生命いのちであった。私を育て上げた母の慈愛に気付かせていただくことを通じて、そうした菩薩がたの大きなお心に接することができたのも、また悦びである。

お地藏さまの万物育成の徳、観音さまのお慈悲の徳は、それぞれ大み親なる阿弥陀さまの、衆生済度のお働きの一面である。私は、その大み親のみ名を呼び「南無阿弥陀仏」と称えたてまつる声が、何故か「お母さん」と母を慕う声と相通じるように思えてならない。身も心も任せきり、母に手を引かれて道を来たように、阿弥陀さまやお地藏さま・観音さまの大きな袋に護られて、これからの人生を歩みたいと思っている。

■ 平安朝にみる老の運命 ■ ■ ■

曾^そ田^だ文^{ふみ}雄^お

(島根大学教授)

一

ここ数年間の、日本人における平均寿命の延びには目覚ましいものがある。老人対策が社会問題となるのも当然な話。それにつれ、老人、ひいては定年に対しての概念が変動しよう。かの五十五歳定年の如き、一体規準は何に拠っているのであろうか。筆者の勤務先を例にとろう。其処では、定年制が分野毎にまちまちで、事務官なら六十歳、教官なら六十三歳、そして用務員にあっては六十五歳というように、単一機構内でさえ統一されてはいない。この件に関し、現在だけに目を向けることなく、昔はどうであったか、という点も、温故知新の語を

持出すまでもないこと、十分配慮されて然るべきであろう。

というわけで、筆者の専攻する平安朝を対象に置いて、叙上の件を採上げてみることにする。

二

平安朝の文学作品からは、年齢に関し「年賀」のことが上ってくる。それぞれは、四十賀、五十賀のように呼ばれ、その年齢に達したところで祝いが催される。今日の如き、還暦、喜寿、米寿、白寿など、いずれもが六十

酒債尋常行処有 人生七十古来稀

に由来する。但し、この古稀なる思想は、杜甫自身による創始では決してなく、はやくは『礼記』に見え、その一つを掲げるなら、

七十曰老、而伝。

なる記述から汲取るも可であろう。そこにいう「伝」とは、家の事を子孫にゆだねることを指しているらしい。つまり、平安朝の、七十賀乃至古稀なる思想は、実のところ舶来品であった。が、かなりその思想は広く行き及んでいたようで、

只今よき人の聳は、滋野の宰相こそあらめ。御年や少し老い給ひつらむ。さりとて七十にはまだやあまり給はざらむ。

(宇津保物語「祭の使」)

一、七十七、八十八、あるいは九十九と、例の厄年四十二歳をも加え、十進法の点からは半端な数が選ばれるのに反し、こちらは、かっちり十年刻みの形をとる。半端な数が年齢の上で喜ばれるようになるのは、およそ室町期以降かと考えられるが、平安朝では、未だ左様な考えは生じていない。これには、文学の享受層が貴族から武士・庶民へと拡がっていったことなど考慮されよう。

平安朝の年賀は、四十歳に始まるけれども、平安人は、その年齢がいわゆる定年を意味したり、万事を次代にゆずる年だというようには考えていなかった。そして、年賀は、十年刻みで行われる。まだ百賀なる例は拾うに至らないけれども、九十賀なら確実に存する。

年賀、即ち賀の祝いは、斯様に時代により変動してはいくけれども、只一つ、平安朝から今日まで一貫して変らぬ年齢が見当る。七十歳がそれである。いうまでもなく、別名古稀と呼ばれるそれは、杜甫「曲江詩」の、

朝回日日典春衣 每到江頭尽醉歸

今年なむ七十に成り給ひけると聞き給ひて、大納言の仰せける、行先遠く、「またもしてんとおぼゆる人ならばこそ、のどかになども思はめ。……」

（落窪物語、卷之三）

年、七十ばかりにて、「今は終りの行ひをせむ」とて、籠りたるが、

（源氏物語「薄雲」）

土御門の大臣も、正暦四年七月廿九日に失せさせ給ひにしかば（中略）いとあはれなり。御年も七十ばかりにならせ給ひぬれば、理の御事なれど、殿の上いみじくおぼし歎きたり。

（栄花物語、卷第四）

と、諸文献にかなり拾うことができる。

その際、右掲諸例からも認められようが、底にちらつく通念として、七十には、何時死んでも悔いない年齢、なる考えがひそんでいる。而して、『宇津保物語』の例からは、老齡とはいえ、七十に達せぬうちは、まだまだ他

にひけを取ることはない、そのような考えの含まれてゐることも読取れよう。

何か、人の惜しむべきほどにもあらず、また命の惜しかるべきにもあらず。七十にあまりて、公にも仕うまつりぬれば、ことわり。

（宇津保物語「国譲上」）

七十に我はなりなんとす。いかで六七年生けらんとする。

（落窪物語、卷之四）

など、右の推測を裏付ける。且つ、

七十にあまりぬるに、よろづの事聞き見るに、琴の音よきなむ飽かぬ。

（宇津保物語「楼上下」）

なる例を通じては、七十歳という年齢は、十分に見聞の

行届いている時期、なる考えさえ汲み取ることが可能である。

三

興味をひく用例も無くはない。

七十の翁のいふ事をかく宣ふよな。あな恥しや。

(栄花物語、巻第六)

これは一条天皇の御ことば。帝の歿年は三十二歳故、それは勿論戯れてのことである。時に二十歳。入内したての彰子(道長の娘)に対し、「あまり稚き御有様なれば、参り寄れば翁と覚え」られた帝が、その翁に充てるに、わざわざ七十歳を持出されているのである。

かかる思想、左様な通念のひそむことをふまえつつ、『竹取物語』を読むなら、従来十分な説明のない仄にされた例にぶつかる。妻問いの段にあって、かぐや姫に結婚を強くすすめる竹取翁は、姫との会話の中で、

翁、年七十に余りぬ。

といっている。翁の年齢に関する記載は、いま一度、右より八年ばかり後とおぼしき昇天の段にも現れる。

翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ふには、片時になむ老になりけると見ゆ。

とあって、計算が合わない。

賀茂真淵は、五十は九十の誤記と見た。けれども、後続文からして、納得し難い。何よりも、数ある写本に一致して五十としている点が、誤字説をしりぞける。

筋がことの外入組んでいるとか、非常に長々しい物語でもあればいざ知らず、あの程度の分量からしては、錯誤など生じる余地がないように解される。

作者は重々承知した上で、敢えて、かの矛盾を犯したのではなかったか。かの個所は、作者及び読者には、あ

の姿の低、一切ひっかかりなく読まれてしまっている筈である。

もし、竹取翁の発言を殊更に哀れっぽく見せようとするなら、どうしても八十歳、九十歳といった、より多い年齢を選ぼうとはしなかったか。特に七十歳を挙げた理由は何か。

七十歳を用いた理由こそ、本節初に掲げた一条帝と同類の発想あつてのことで、そのような、七十歳にまつわる通念なるものが竹取作者にも働いていたが為、と理解することが正鵠を射たもの、と思う。かの、

翁、年七十に余りぬ。

なる発言は、作者の意識して試みた技巧と認め、それは、かくや姫の結婚を心から望む翁の切なる願いに発しており、当時の通念のままに口をついて出たものと解した。

四

平安朝の通念からするなら、古稀、七十歳とは、まずもって、よろずの事が完成し、次の世代にすべてを托して隠遁してよい、正に定年時期、ということになる。けれども、あわてることではない。叙上は四十歳をもつて、長寿をことほごうとした時代での話である。今の世に、四十歳をもつて、よくぞ生き延びた、と自他共に祝われて差支えない年齢と考える者が何処にいよう。

日本人の寿命は、延びに延びつつある。かりに、六十歳が長寿のはしりだとしても、平安朝の計算からするなら、それは四十歳、ということになる。単純に加算しても、当時の七十歳なら、今日では九十歳に当るわけ。

六十、七十は鼻たれ小僧の時代に入っているのである。これが素直に慶賀したものか否かはさておき、何はともあれ、長寿はやはり目出度いことに違いない。平安人も、七十歳は知識豊かな時分と考えていた。それに同じで、深い経験を元に、より良い社会を築く上に、七十以上の人は精出して貰いたいものである。

特 別 寄 稿



ある念仏者のアメリカ抑留生活記（上）

窪川信丈 くぼ かわ しん じょう

（東京・寿町竜宝寺住職）

昭和十六年十二月七日。

この日、ホノルルの空は、薄雲が低くたれこめ、風のない静かな日であった。

しかし、夜明頃からひびき出したズシーン、ズシーンという底気味の悪い異様な音が、或る時は強く或る時は弱く、いつやむとも知れなかった。

時がたつに従い、街の人びとのいい知れぬ不安と焦燥は次第に高まり、ざわめきは刻一刻増大して行った。

例によって、アメリカ軍のダイナマイトによる爆破作業の音だという者もあれば、いやなにか重大事件の突発だと憶測する者もあり、だれひとり本当の事を知ってい

る者はいなかった。

午前十一時を過ぎる頃、学校の先生達もおいおい心配顔で集まってきた。

やがて、午後になると、情報はいよいよ頻繁となり、日本軍のハワイ攻撃は最早確定的な事実と考えられるようになった。

ハワイ日報の記者が、日本軍の飛行機らしいものを見た者がいる等と報告してきた。

だれもかれも、仕事を投げ出して、全部、戸外にあつまり、お互いに不安な顔をつき合せて、しきりになにか話し合っていた。

平常はともかく、いよいよいざ日米開戦となってみると、在米日本人としての心境は、実に複雑であり、また深刻きわまるものであった。

最後まで平和を祈りつづけた者も、血気にはやって日米開戦に快哉をさげんだ者も、在米日本人というこの皮



故窪川旭丈師遺影

ーハワイ帰国後竜宝寺にてー

肉な運命の前に、一つにくくって投げ出されたようなものであった。

老人婦女子は、アメリカの銃後を守らねばならないし屈強な青年達はアメリカの軍人として、アメリカに忠誠を誓わなければならない。

戦争の持つ巨大な残忍性は、人間の悲劇を容赦なく、また限りなく繰りひろげてゆくに違いなかった。

私は、ぞくぞく別院に集ってくる信徒の人達に、無用な騒ぎをやめて、一刻も早くめいめいの家へ帰り家族の者をできるだけ安心させ慰さめて下さいといった。

一同は、いかにも名残り惜しそうに、お互いに、元気で、丈夫でといった堅い握手をかわしあい、暗い気持ちを引きたてながら帰って行った。

時刻はすでに四時をまわっていた。私は一同が引きあげた後、一人でいつものように本堂へは行って行った。

そして、敵とか味方とかいうことでなく、日本人とアメリカ人のために、一人でも多く無事であるよう、一日も早く戦争の終るよう、心から祈念の読経をつづけ、お念仏をとんでいた。

夕刻の勤行を終えて居間に戻った時、時計が丁度五時

を打った。身のまわりのものを片づけ、さて浴室にはいろうとした時、ハワイ官憲二名が突然来院し、即刻同行するよう命ぜられた。

詳細の事情を尋ねる暇もなく、せきたてられるままに玄関まで来た時、留守番の老人夫婦がおどろきの眼を見はってかけつけてきた。

勿論、長時間の話は許されず、簡単に別院の事は万事総代達に相談してもらおうよう頼み、白衣一枚の姿で車中の人となった。

一瞬、不吉な予感がいなづまのように脳裡をかすめ冷たい風が背すじを吹きぬけていくように感じられた。

恐らくふたたび無事な姿で別院に帰る日はあるまいと思ひ、去りがたい気持で別院に向ってしばらくのあいだ静かに合掌した。

別院の将来のことや、朝夕親しみ交った信徒の人達のことを考えると、暗然として眼頭が熱くなるような思いだった。

車は、猛烈なスピードでホノルルの街を東へ走っていた。どこへ行くのかまるで見当はつかない。数珠をつまぐりながら、終始黙って緊張に顔をこわばらせている官

憲の顔を見ているうちに、不思議にも私の気持はかえっておちついてきた。

ここ数カ月の間、私達日本人の胸につかえていたあの重い鉛のようなものが、ころりと飛び出してしまったような感じであった。

きたるべき時がついにきた！

この冷厳な現実、あらゆる苦悩と不安を越えて、私に新しい勇氣と強い覚悟をあたえてくれた。

車はやがて、ホノルル港近くの税関事務所の前にとまった。ただちに官憲の案内で、会議室らしい二階の広間へ通された。そこには、顔なじみの人達が既に十三人程きていた。日本人会の会長M氏が、飛んできて握手するやいなや、

「いやあ！ 僧正もおいでなすったか」

と、なかなか元気な声で話しかけ、私の肩を思いきり強くたたいた。

銀行会長のA氏も、いつものように巨体をのっそり運んできて、笑顔で私を迎えてくれた。

「いよいよ始まりでしたね」

と、言葉短かくさりげなくいっていたが、その語調は

どこか重く淋しかった。

窓外に赫くきれいに輝いていた落陽も、いつか影をおとし、濃い夕暗がうす暗い部屋の中を一層憂うつにしてみせた。

ざわめいていた人達も、だんだん落ち着いてくると、話は、いつとはなしに、家に残された家族の身の上や、財産の始末、自身の将来を案じる問題に移っていた。

夜七時頃には、総数百七十三名となった。

各宗の僧侶、各学校長、銀行商社又は団体の会長重役等、職業的には雑多であったが、いずれも指導者の地位にある人達ばかりであった。

官憲が、十分ごとに見廻りにきた。いつも明朗なアメリカ人もさすがに、この時ばかりはニガ虫をかみつぶしたような表情で、私達を監視していた。夜になっても不気味な音はなかなかやまなかった。

やがて、時計の針は、私達の運命をきざむかのように十二月七日に別れを告げ、十二時を報じた。

環境の激変のため、興奮し焦立った神経は、夜更けとともに、ますますたかぶり、だれ一人眠る者はなかったのである。

かくして、むせかえるような人息れと、うめくような人声のうちに、まんじりともせぬ抑留生活の第一夜はほのぼのと明けた。

きのうの出来事は夢かと思われるような、静かな朝だった。

「日本軍は上陸したにちがいない。ハワイは、きっと三日間で陥落する。そして、われわれは救出される」

だれかが、気の狂ったような声を張りあげて叫んだ。

絶望が、一瞬にして歓喜と変り、いまにも万歳の嵐が吹きまくるかのような騒ぎであった。

しかし、この妄想は、余りにも早く、余りにも早く打ち破られた。

午後四時、私達は、細密な身体検査と氏名点呼を受け午後八時には、ホノルル港外の小島サウンドランドに監禁されることとなったのである。

監督官の監禁命令の声は、さながら諸行無常のひびきそのものであった。

この瞬間、一同の顔色はサッと蒼ざめ、失望と不安に一時は茫然として声を出す者もなかった。

まもなく、日本軍に救出されるものと信じていた人達

の落胆振りは余りにもみじめだった。

いきり立った一部の人達が、家族との最後の面会を嘆願したが、ついに許されなかった。喧騒と悲痛の交錯した異様な雰囲気の中に、いよいよ最後の時がきた。

午後八時、私達は、二十人一組となって、埠頭からつぎつぎにランチに移された。

エメラルドグリーンと呼ばれる美しいホノルルの海もその夜は、風もなく墨を流したように黒ぐろと静かに眠っていた。

島は、海岸から遠く丘陵の見えるあたりまで一面の砂原だった。椰子の木が、あちらこちらにこんもりと森のように繁っているのが見えるほかは、目ぼしい建物もない殺風景なところだった。

収容所は、大きなテント張りの部屋で、板張りの床と左右両側に並んだ吊棚式三段の寝台と、そして小さな窓が二つ、まるで野外演習の仮兵舎を思わせるようなものであった。一箇所には十八名を一班として収容され十班に分けられた。食事、洗濯、掃除等一切が当番制できめられた。食事、パン、スープ、果汁、野菜、肉類、いずれも小量とはいえ、空腹の心配はなかった。

労働は、午前二時間、午後三時間、海岸線一帯のコンクリート作業の砂利運びが主な仕事で、他は畑作りだった。監視は厳重をきわめ、五名の兵士が、昼夜間断なく警戒していた。規則を守り、忠実に仕事をしているかぎり、決して、虐待や暴行をうけるような事はなかった。

戦争はどうなっているのか、自分達の運命はどうなるのか、残された家族や財産はどうなっているのか、日がついに従って、一同の不安と焦燥はつのるばかり、食事も取らずふさぎこんでいる者、床についてもまるで眠れない者、神経を犯されてしまい、指先がふるえて字も書けないなどと、嘆くような人達が続出した。

或る日の午後、作業に行く途中、無断で隊列を離れてかけ出した者が、二発の威嚇射撃をうけたこともある。もちろん、逃亡の目的でやったのではなく、神経衰弱からの発作的行動であった。

その夜は、恐怖心から神経がたかぶり、不眠、頭痛、幻覚などを訴え、騒がしい一夜を過ごした。

夕食後、私は、一人ぼつねんと窓際に立って、暗い外をじっと眺めていたE氏のそばへ行った。

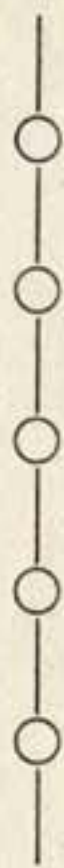
彼は、ある貿易会社の支配人だったが、まだ四十歳を

越したばかりの壮年だった。

最近、目立ってやせ衰え、夜などもほとんど眠れない様子だった。

「どうですか気分は、なにか大変心配していられるようですか」

私が話しかけると、彼は、「はい、大丈夫です」といったが、その声はかすれ、血の気のなくなった顔色の奥に、なにか深い悩みがかくされているようだった。(未完)



ハワイ開教八十五周年の当年、その貴い念仏の布教実践の歴史の歩みの中に、第二次世界大戦―大東亜戦争という、まことに暗い悲しい歴史的現実のページが刻み込まれています。そうした中で、一人の念仏者が生きぬいた赤裸々な記録を、戦後もすでに三十三年が光陰矢の如く過ぎた現在、今、静かに開き尋ねてみました。実はこれは、わたしの亡父の炉辺談話の数々の中から、いささか一文にまとめてみたものなのです。

窪川旭丈——明治六年一月六日生

昭和二十年十一月二十一日没

昭和十三年一月、ハワイ開教監督として赴任、昭和十六年十二月アメリカに抑留され、昭和十八年十月捕虜交換船で帰国。

「浄土」教化トラクト

『浄土宝暦』

B6判・表紙共四十ページ

定価 一部四十八円

送料実費

◎檀信徒の皆様への新年のご挨拶等に恰好の施本となります。弊会へのご助成という意味もこめて、できるだけたくさんのご注文をお願いします。どうぞ広くご利用下さいますようくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

発行 法然上人鑽仰会

■善導大師の生涯とその教え■

——

◇◇善導大師と法然上人◇◇

○

「善導大師」と申しあげても、一般の方がたにはあまり、馴じみがなく、ご存知の方はすくないようです。しかし「善導寺」というお寺は諸処方々にあり、きっと皆様のお近くにもあると思います。お寺の名前は、この善導大師（六一七―六八一）のお徳を讃仰する意味からしてつけられた場合が多いわけです。しからば、なぜ善導大師が讃仰されるかと申しますと、実は浄土宗を開かれました法然上人（一一三三―一二二二）が、「偏えに善導一師による」といわれて、この善導大師のお説きになられた教えに従って立教開宗されたからであります。

若きころの法然上人は、人生に対する不安と苦悩にう

ちひしがれ、安らぎと救いを求めて叡山に学ばれましたが、日暮れて道遠く、求めながらも安らぎは得ることができずに、かえって悩みは深まるばかりでした。黒谷に隠遁した十八歳より二十五年の長きにわたり、法然上人の血みどろの求道生活がつづくわけですが、なお心の安らぎを得ることができませんでした。当時の比叡山は学問の府でもあって、戒行に勝れた叡空上人（一二三〇―一九二二）や、学問に明るい顕真法印（？―一二七九）などの学者や名僧が数多くおられました。

しかし、法然上人は、どうして天台の教学に満足することができず、当時の学者や名僧を真の師と仰ぐことができなかったのでしょうか。それはただ単に知識欲を充たしたり、権力の座に満足にあたえられても、人間の根

本的な苦惱から救われるのにはほど遠いものでした。

「なげきなげき経蔵に入り、かなしみかなしみ聖教をひもどく」といった求道の悩みの深さが、やがて黒谷報恩蔵における幾たびかの大蔵経の読みかえしとなったのです。そして、法然上人の眼光が紙背に徹して、善導大師の説かれた『観無量寿経疏散善義』の中に示された、

「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に、時節の

久近を問わず、念々に捨てざる者、是れを正定の行と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に」

の文に、上人の求めても救われなかった迷いと深い懊悩は一瞬にしてはれわたり、善導大師を真実の師匠と仰ぎ、絶対の帰依をはらわれて、浄土宗を開かれる確信をえられたのであります。法然上人みずから『選択本願念仏集』に「偏に善導一師に依る」とお述べになっておられますことは、なにびとによっても救われえなかった量りしれない苦悩を、善導大師によって、はじめて救済されたのであり、その感動と歓びは言葉にたとえようもなく、想像にあまりあるものがあります。

○

このように、中国の善導大師によって示された浄土の法門が、わが国において法然上人によって全面的に受け入れられ、鎌倉時代に浄土宗が開かれるわけですが、それはただ宗教の独立の形をとっ



善導大師像—百万遍知恩寺蔵—

ただけの意味ではなく、日本の宗教史のなかで、宗教に対する認識についてのコペルニクスの転回がなされたのであります。しかも法然上人の人格と相まって、わが国の精神界に大いなる感動をあたえ、あたかも宗教改革の観を呈したのであります。

さらに、法然上人の門下には、あとを継いだ鎮西上人（一二六二—一二三八）をはじめ、証空上人（一二七七—一二四七）が浄土宗西山派を開き、親鸞上人（一二七三—一二六二）が浄土真宗を創始し、いずれも後世多大の感化をあたえられたのであります。また、鎌倉時代中期には一遍上人（一二三九—一二八九）が、西山派の流れより出て時宗を開かれましたが、これらはいずれも善導大師の信心をよりどころとして、あらたな仏法の光を闡明にされたのであります。

まことに善導大師は、日本仏教のあらたな蘇生のために絶大な力をあたえ、日本民族の精神活動に偉大な影響をあたえられた方であります。

もとより浄土教については、古来よりあまたの名僧学者が世に出でて、浄土の教義について説き示されております。すなわち、インドでは竜樹菩薩（一五〇—二五〇頃）、

天親菩薩（三二〇—四〇〇頃）があり、中国では、廬山の慧遠法師（三三四—四一六）、北魏の曇鸞大師（四七六—五四二）、西河の道綽禪師（五六二—六四五）などがあらわれています。このほか、浄土の根本聖典であります『無量寿経』、『観無量寿経』などを注釈された有名な人には、隋の浄影寺慧遠法師（五二三—五九二）、天台の智者大師（五三八—五九七）、唐の嘉祥大師（五四九—六二三）などがあります。けれども、これら著名な人びとも、必ずしも仏の本意をさぐって、經典の真意を明らかにすることはできませんでした。しかるに善導大師は、釈尊出世の本懐を知り、弥陀本願の真意をさとられたのであります。とくに他力浄土門の信仰の真髓をとらえて、これらの經典を解釈し浄土教義を大成して、民衆を教化されたのであります。ゆえにむかしから大師の教義を、自解仏願の妙釈とか古今楷定の説として、釈尊の教法を同じように尊重されているのであります。

法然上人が、浄土列祖のなかで、とくに善導一師を選ばれて、その教えによって浄土宗をお開きになり、決してほかの師にたよらなかったわけがここにあるのです。ゆえに法然上人の教えは、そのまま善導大師の教義につ

ながれており、善導大師の教えは、すなわち阿弥陀仏の教義であります。

法然上人は『選択本願念仏集』のなかに、

「善導はこれ弥陀の化身なり、しかれば善導の観經の釈は、これ弥陀の真説なり」

といわれております。

また、法然上人の伝記である『十六門記』には、

「歡喜の余りに聞く人なかりしかども、予がごときの下機の行法は、阿弥陀仏の法藏因位の昔、かねて定め置かるるをやと、高声を唱えて、感悦髓にとおり、落涙千行なりき」

といわれておりますが、法然上人が善導大師を心のなかに仰ぎ、しかも夢定中まのあたりに、半金色の聖者であられた善導大師のお姿を拝まれたときの法然上人のみ心が、よくよく窺うことができます。

「善導和尚の観經の疏の「一心に専ら弥陀の名号を念じ……」という文を見得てのち、われらがごときの無智の身は偏にこの文をあおぎ、もはらこのことわりをたのみて、念々不捨の称名を修して、決定往生の業因に備うべし。ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、またあつく弥陀の弘願に順ぜり。「かの仏願に順ずるがゆえに」の文、ふかく魂にそみ、心にとどめるなり」

と『勅修御伝』第六には、法然上人のお言葉として述べられていますが、『観無量寿經疏』に説かれている思想の深さをよくよく味わえたものであります。なぜ称名念仏が往生の正因であるかという、称名念仏こそ、もつともよく阿弥陀仏の本願に順ずる修行であるからであるというのです。だれでも、どこでも、もつとも修行しやすい方法で、阿弥陀仏の本願をば、すべての人びとのための救いの道を示されたところに善導大師の教えの偉大さがあります。

(宮林昭彦)

浄土句集



東京 末常てる子

里心泣きに行きたく秋茄子

松以外鉄軽ろやか手入れすむ

評 秋茄子は嫁に食わすな——こんな美味

いものは嫁に食わすなどは現代にはむかないようである。故郷には老いし父母がまだ健在で居るらしい。嬉しいにつけ悲しいにつけ秋ともなれば泣きに行かれる親様があることは倅であるばかりか、母が作って呉れた古里の秋茄子を泣きに行つたついでによばれることの嬉しさよ。

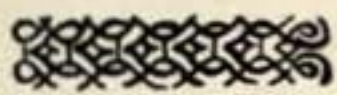
福岡 高良 慈風

腰のばしのばして墓を洗ひをり

評 墓を洗っている人は老婆らしい。年取

れば腰も曲る。その曲った腰を伸して又

一田牛 畝選



伸しながら、先立ちし夫の墓を洗って居れば愚痴もこぼしたくなり、胸のうちを聞いて貰いたいこともあるらしい。

京都 安藤 寛

子燕の巢立ちし後の仏事かな

評 人の出入りする軒下に燕は巢を作る。

餌運ぶ親燕は忙しく、待っている子燕は泣いてうるさいが、子燕が巢立ってもとの静寂に戻った時に法事が営まれ、落付いた雰意気の中にしみじみ亡き人のことを思い浮べつつ、親の為めにはその子、夫の為めには其の妻が、さては先祖代々の為めにはその子孫が追善申すが定まりたるつとめである。

山口 三井 寛静

葉桜の御廟に小さき手を合す

評 念仏門の元祖法然上人の御廟ならん。

桜は散って葉桜となり万緑の中に祖師は眠って在す。その御廟に孫連れて詣でられ、祖父が手を合すれば、孫も又手を合せるのである。手を合する習慣が大切だ。

福岡 荒牧 還愚

地藏盆由来はみんな悲しかり

評 地藏尊の由来はなべて悲しい。飢死し

た人、恋に破れて死んだ人、交通事故死、特に多いのが水子地藏で、由来はみんな悲しいことばかりで、祭ることによって地藏尊から守護して貰うことになる。

福岡 原 敬二郎

亡くなりし患者慰霊の盆踊

東京 真野よし子

水引の袂に触るる山路かな

東京 星野 小登
信濃路の山裾に咲く蕎麦の花

東京 鈴木 葉子
父母^{ちちはは}へ心を馳せて盆の月

福岡 堀 松月
雛僧も一人前なり盆の布施

東京 鳥居 千代
御仏に手向けし百合の香の高く

東京 猪瀬 幸子
好まれし菓子^{かし}のせてやる精霊舟

福岡 国友 星畝
鈴虫の音色^{ねいろ}異なることを知る

東京 阪入志津枝
蟋蟀^{こらうぎ}に縫ふ手を止めて耳澄す

東京 阪入 等達
虫喰ひの和綴^{わとじ}もありぬ書を曝す

福岡 前田 秀峰
車にて家族総出の汐干狩

三重 森 静枝
棚経の僧の白足袋足早に

東京 真野 竜
石仏に綴^{よちやく}絡なせる蔦紅葉

福岡 新森 耕春
利根川にかかる大橋風涼し

山形 松田 光誉
白萩のこぼるる寺の句会かな

東京 田中 秀代
池の面に水輪ひろごり風涼し

福岡 行正 明弘
黒々と門火の跡の老舗かな

神奈川 松本せつよ
流れ来る秋の夕べの鐘淋し

東京 栗原やえ子
百キロで飛ばすロッキ―旅涼し

福岡 釈河野ねはん
廃坑^{くさむら}の叢の中月見草

群馬 島津 か寿
野分あと枝折れ荒れし坊の庭

福岡 権藤みきを
うつむいて秋海棠の紅淡く

福岡 林 澄山
九十の母息災に墓洗ふ

山形 松田 允子
小さき手を小さき墓標に秋の蝶

大分 丹羽 難中
石仏の火祭旧杵の盆果つる

一田 牛畝
天蓋の下に十夜の嫁姑



御名を唱える！

— インドの古典『バーガヴァタ・プラーナ』より

小山典勇

ひたいのところへお血脈のご印をおしてくださる。するとたちまち罪障消滅、現世の罪が減して極楽へゆかれるというありがたいものでございます。

こんなぐあいに、善光寺でお血脈のご印をくださるので、みんな極楽へ行ってしまったって、地獄へゆくものがありません。それがために地獄のほうは、たいへんな不景気になって、……

地獄の閻魔大王は娑婆世界の様子をみると信州善光寺発行の血脈のご印の功德によって罪を犯した者までが極楽に向うというありさま、従って地獄には罪人が一人も

来なくなり開店休業となった次第を知ります。そこでその対策として、血脈のご印を善光寺より盗みだしてしまえば地獄へくる者も多くなるだろうと考え、石川五右衛門を派遣します。ところが、

「はは、ありがてえ、かたじけねえ。まんまと首尾よく善光寺の奥殿にしのびこみ、奪えとったる血脈のご印、これせえありゃあ、大願成就、ちえー、かたじけねえ」

と、いただいたから、そのまま極楽へいっちゃまった。(注二)

さてお話しかわって次にインドの古い物語り。

カンヤークブジャという町にアジャーミラというバラモンがいました。彼は召使い女を妻にしました。その結果召使い女との接触によって汚された彼はバラモンとして積んだ善根功德を消失してしまいました。

彼に十人の息子があり、最年少の息子は、最高神の名をとったナーラーヤナという名で、両親の甚々愛するところでした。

子供への愛執にとらわれた彼は、自分が食べては息子に食べさせ、かんででは与え、飲んでは飲ませていました。そして愚かにも死がまぢかに近づいていることに気がつきませんでした。

こうして人生を過して、あさはかにも死ぬ時が近づいても、末子ナーラーヤナに心を奪われていました。

手に索を持ち、曲った鼻・身毛のさかだつ・極めて恐ろしい姿の三人の男（実は閻魔大王の使者）が、自分を連れにやって来たのを見て、心を乱し、遠くでおもちゃあそびに夢中になっている息子ナーラーヤナに向って、長くのびた声で、一声高く呼びました。「ナーラーヤナ

よ！」

いまわのきわの彼が、最高神ナーラーヤナの御名を叫んだのを聞いて、閻魔大王の使者は卒倒しました。

アジャーミラの魂を身体から引き出そうとしていた閻魔大王の使者を、最高神ナーラーヤナの従者が現われて力づくで妨げたからでした。

妨害された閻魔大王の使者は彼等に言いました。「閻魔大王の御命令を邪魔する汝らは何物か。誰の家来であるのか。どこから来たのか。またどうして妨げるのか」

すると最高神ナーラーヤナの従者は答えた。

「汝らが閻魔大王の使者なら、私達に正義の特徴、また正義のありのままについて話したまえ。更にどのような状態が望まれるのか。刑罰を受けるこの世の行為は何であるか。何で人にとって罰せられるのか」

「ヴェーダ聖典の教えにかなうものは正義であり、反するものは不正である。実にヴェーダ聖典の教えこそは最高神ナーラーヤナであり、一天啓のものと我々は聞いている。純質激質賢質の三要素より成るこの生類は、自身の状態に、徳・名・行為・姿によって如実に現われる

のです。

また太陽・火・虚空・風・牛・月・薄明・日中・方角・水・地・時・徳、これらは人間の行為の証明者です。

それらによって不正邪鬼であると知られた者は、罰の境界に結びつくのです。一切の行為を行う人には、行為に応じてふさわしい罰があるのです。

人には不正邪悪な行いと正義善行な行いとが今生であるように、後生においてもその結果を同様に享受するのです。

さて彼アジャーミラは、かつてはヴェーダ聖典の教えをみにつけ、素性のよさ・立派なふるまい・美德の住所のようでありました。また誓いも固く、温和・誠実であり、真言陀羅尼を知る清浄な人でした。

師匠・祭式の聖火・客人・長老の奉仕尊敬につとめ、傲慢なところなく、言葉を整え人を恨むことなく、生類の友、聖人でありました。

ところがある時、父の使いで林へ行き、果実・花・クシャ草・薪をもって帰る途中でしたが、他人の情事を盗みみてしまい、正気を失って、愛欲の神カーマのなすがままになってしまいました。

彼はヴェーダ聖典の教養のある通り、また自尊心のある限りは自己を自己によって制していましたが、愛欲にふるえたつ意を集中することはできませんでした。

娼婦の流し目で、思慮分別をさし貫ぬかれた彼は家柄も良く、柔順なる自分の妻を一時み棄てたのでした。

さらに思慮あさく、彼は、正当に得た金も不当に奪った金も、彼女に提供したのです。

それゆえ我々は、過失を犯し、しかも償いをしていない彼を、刑罰によって清められるところへ導びくのです」

このように閻魔大王の使者が言うところ、最高神ナーラーヤナの従者は言いました。

「オー！残念だ。正邪善悪を判定する正義にも等しい集会において、真の正義を知らないものが関与しているとは！彼等によって、邪悪でない罰を受けるべきでないものにまで刑罰が与えられるとは！」

（汝らは罪を償っていないというが）彼は何千万劫にもほる転生の罪を償ったのである。即ち無意識にも最高神ナーラーヤナの吉祥な御名を叫んだのですから。

盗人、酒飲み、友人殺し、バラモン殺しなどの殺人、

師匠をけがす者、牛を殺す者、その他の罪人、あらゆる罪人にとって、この最高神の御名を唱えることこそ、罪の償いである。その境地は最高神を思念することであります。

今や一切の過失の償いをした彼を連れて行くべきでない。彼は正にいまわのきわに、最高神の御名を唱えましたから。

聖仙によって語られた大罪小罪やその償いの軽重を知り、彼等によってそれらの過失は苦行・布施・真言などによって清められる。非法より生じた心もまた、最高神の御足を供養することによって清められる。

かの最も有名な最高神の御名が、無意識であれ意識してであれ唱えられるならば、あたかも火が薪を焼くように、過失を焼き尽すのです」

こうしてパーガヴァタ派の教えが明らかにされると、閻魔大王の使者は、バラモンを索よりほどこき、死から解放しました。

索から解かれたバラモンは正気をとりもどし恐怖もきえて、最高神の従者に敬礼しました。

直ちに最高神ナーラーヤナに対して熱烈なる信心をお

こし、その讃歌を聞いては、自身の不浄なる罪を思い出して大いに後悔しました。

「オー！何んと私は、善人に批難され、行いも悪く、家の中の煤すすのようなものだった。貞節な妻を棄てて、不貞なる酒のみ女に近づいた。

今や年をとり、よるべのない、親類もない苦悩に悩む両親を私はみすてていた。私は恩を知らなかった。

私は必ず恐怖の地獄に落ちるであろう。そこでは私のような正法を乱し勝手きままな者は、閻魔大王の地獄の責苦を受けるであろう。

私は今後再び暗い闇黒に自心をおぼれさせないよう、心と感覚機官という風を制御して精進しよう」

解脱を願う人々にとって、業という束縛を断つ方法は、聖地即最高神の御足を賞讃すること以外にない。たとえ人の意が激質贅質の二要素におおわれていても、今や業に結びつくことはない。

こうして罪障を消滅する、深秘な、この物語りを、清らかな信心をもって聞く人、あるいは、熱烈なる信心をおこして唱え語る人は、地獄に趣くことはなく、閻魔大

王の使者に近より見られることもない。たとえ不運な人でさえも、最高神の世界においてはめでたく繁榮する。いまわのきわに、かのアジャーミラでさえ息子の名としてなづけた、最高神の御名を唱えて、神の世界へ行つたのである。まして浄信をもつて唱える人は言うまでもないことである。

〔解説〕

以上はインド教徒の聖典『バアーガヴァタ・ブラー
ナ』（第六卷一・二章）の一節である。本聖典は最高神
をヴィシュヌ、別名ナーラーヤナと仰ぎ、信心崇拜す
る功德を説く。翻訳にあたっては遂語訳をさけ、理解
の便をはかって字句を補い挿入し、固有名詞は統一し
た。また物語りの筋道を明らかにしようといふ心がけ、そ
の結果省略割愛した箇所も多い。

(注一) 落語「お血脈」より。興津要編『古典落語』(続々々)講談社文庫 講談社 昭和五十二年。

なお、今回の翻訳も、前回『浄土』第四十三卷第九号に掲載させて頂いた『バーガヴァタ・プラーナ』より抄訳したものであるが、こうしたインドの古い聖典、物語に、多くの方々が関心を寄せてもらうことを期待したのである。

また前回にも示したが、身近かなインド教聖典の翻訳としては、次のものがあるので改めて記しておく。

『バラモン教典・原始仏典』世界の名著1 中央公論社

『ヴェーダ・アヴェスタ』世界古典文学全集3 筑摩書房

『インド集』世界文学大系、筑摩書房

『ヒトローパデーシャ』岩波文庫、岩波書店

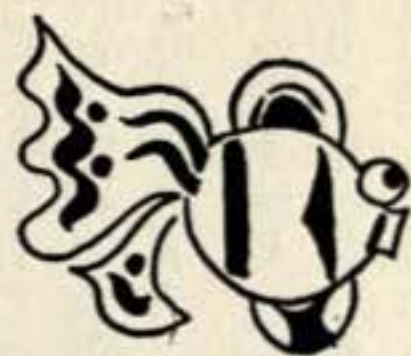
『リグ・ヴェーダ讃歌』 岩波文庫、岩波書店

『シヤクンタラー姫』岩波文庫、岩波書店

『サンスクリット文学史』（辻直四郎）岩波全書、岩波書店

『浄土』誌の購読希望者、新会員のご紹介を広く
お願い申し上げます。

法然上人鑽仰會



『無量寿経』に説かれていること(二)

吉^{よし}村^{むら}孝^{たかし}

さて念仏者は常に称名念仏で南無阿弥陀仏と阿弥陀如

来の名号を称えておりますが、『無量寿経』の「讃仏偈」の前の所に如来に十の名号のあることが書いてありますのでこの意味を尋ねてみましょう。

仏の十号とは、如来・応供・等正覚・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊であります。

如来とは、真理に従ってこの世に来て真理を示す人のことです。

応供とは、供養を受けるに値^{あた}する人のことで、供養の本当の精神は感謝の心持ちで、感謝の心持ちが形に現わ

れたものが供養であります。

等正覚とは、真理を正しく覚った人のことで、インドでは一般に仏道修行の完成した人の意味に用いています。

明行足とは、明は知ることです。知識のことです。行は実行のことで、その両方が共に揃っているということですから。この二つは共に大切な事ですが、どちらか一方だけでは役立ちません。知識があってもそれを用いなければ無知と同じですし、又、実行してもそれに知識が伴わなければ空虚な無意味な実行に終わってしまいます。

善逝とは、善は十分に・完全にという意味があり、逝は遠くへ去る・亡ぶという意味ですから、善逝は一切の

執著が完全に離れて再び戻って来ないということであり
ます。

世間解とは、世間をよく知った人のことで、世間は煩
悩ある人々が生活している境界のことで、解は悟る・と
きはなすの意味ですから、世間解は煩悩の境界から離れ
て煩悩のない境界に入ったことであります。

無上士とは、この上ない勝れた人ということでありま
す。

調御丈夫とは、調御は馬や象などを馴らすことで、丈
夫は確かで間違いないことです。調御丈夫はどんな
人でも仏が永く教えていれば必ず教えに帰依するよう
になるということでもあります。

天人師とは、天はインドで古くから信じられていた事
で人間世界以外の天上界という別な世界のこと。天上界
の神と人間界の人が共に師と仰いで帰依できる仏とい
うことであります。

仏・世尊とは、仏も世尊も共に悟った人・覚者の尊称
であります。世の中の人々が皆仰ぎ尊ばなければなら
ない最高の覺りを得た人のことであります。

この如来の十号は如来の性質・はたらきを十の言葉で
讃歎したものであります。

この世に真理を示す為に現われた人・供養を受けるに
値する人・真理を正しく覺った人・知識と実行と共に具
わっている人・完全に煩悩を消滅した人・煩悩の世間か
ら解き離れた人・この上ない勝れた人・どんな人でも必
ず教えに帰依させられる人・天上と地上の神と人に共に
師と仰がれて帰依される人・仏世尊と世の中の人に仰ぎ
尊ばれる最高の覺りを得た人、このようにこの上なく尊
敬されている仏、これが阿弥陀仏・釈迦牟尼如来であり
ます。

私達は毎日阿弥陀仏に救わりたい為に、又、功德を得
たい為に最高の覺りを得た仏を念じております。如来の
十号の全貌は『無量寿経』に細部に亘って明らかにされ
ております。私達がもしもこの十の中で自分にも実行で
きそうな事はどれかと考えました時、煩悩を消滅するとい
うことがあります。人生は苦であるといわれるほど煩
悩は多いわけですが、その煩悩を一つづつ取り除くこと
ができました時、それだけ阿弥陀仏に近づいた事になり
ます。

經典を見ますと、もしもこの經典を学べば苦悩を除くことができるのか、こうすれば功德が得られるとか書いてありますが、これは教えの通りに行うことによって成じできるのであって、私はそんな事は学びたくないという人があれば、その人は如何に永く信仰しましても功德は得られません。何故ならそれは真理に背いているからであります。

釈尊は人には皆仏性、つまり仏になれる性質があると『涅槃經』に教えております。私たちは仏になる為などという望みは考えもしませんが、自分の廻りや世間の出来事などを考えて見ますと思いの外、多くの場合に物事に執われている為に起きた争い事が多いことに気がつきます。

このような事に気が付きました時、自分は執われないようにしようと心に定めますと、それだけ阿弥陀仏に近づいた事になります。世間の人と仏との間に渡れない谷があるわけではありません。一本の真理の道があるだけです。その一筋の道が執著を離れるということであるとしみすれば、何とか心を堅固にして少しづつでも仏に近づく為に努力すべきではないでしょうか。

御参考に、岩波文庫から「浄土三部經」上（『無量壽經』、下（『阿彌陀經』・『觀無量壽經』）が出版されています。如来の十号は上二二八頁から、道を求めるは上二三〇頁の偈から、仏心は大慈悲は下五六頁から引用しました。

◇◇「浄土句集」欄投稿要項

ホトトギス同人の一田牛畝先生（福岡市正定寺住職）を選者にお迎えして誌面に登場した、「浄土句集」のコーナーはなかなか好評です。どうぞ、俳友のお仲間をお誘いいただいて、ふるってのご投句をお願いします。ことに初心者の方々こそ、たくさんご投句下さい。

一 ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一 投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会宛

〇〇江戸後期の宗門歌人〇〇

良洗上人の研究 (三)

よし だ こう がく
吉 田 光 覚

(岩手県紫波町極楽寺住職)

(十) わらべ歌

一葉落ちて天下の秋を知る。時、正に秋だ。万物豊饒の秋、山に遊びて、織りなした錦絵に自然の美に酔う若人。寺院の境内に子等を引率れて生産の味覚を教える大人。四季は殊に詩歌の豊庫である。

筆者は十月十二日晚、箱根温泉強羅五葉亭での芝中卒五十年目のクラス会に、これが最後とも思い出席して、十三日晚、良洗上人が住職された観音寺に立寄った。翌朝五時半、上人の墓参をして石段を降りて来たら、一青年がやって来た。

青年「寺の方ですか」「そうです」「明日、日曜なので芋煮会をやるから、境内の一角を貸して頂きたい」「よ

ろしうございます。」「早く場所をとっておかないと、良い所がとれなくなるから、宜しく願います」と言つて帰った。後で見たら中央に「桑折西大隈方部、代表浴谷、十五日」と記した小札が立ててあった。

「僧正も来ませ芋煮ん夜の栗」

遜阿老人

この一句からして良洗上人などが習慣づけたのではないかとも思われるが、この節に境内での芋煮会が年中行事の一つとなっている。学童に大人も交って百人位集まる。組々でコンロを持参する人、手頃の小石を集めて竈かまどを急造するグループ、鍋を乗せ、さと芋、蒟蒻、さつまいも、鳥肉等を入混ぜて、たらふく喰い乍ら大いにはしゃ



いで、爽やかな秋の一日を行楽する。正に一味和合の風景である。

山から一人二人農夫が降りて来た。多分、背の籠にはキノコか栗が入っているのであろう。

「うまそうだない」「休んで行かんしょ」

佇んだまま方言丸出しの言葉が交される。喧噪な現代にも俗塵を忘れた一面はある。この辺りを上人は、わらべ歌の終りに小文字で「祖翁も○○の方言を賞玉ふ。：因って此戯あり」と記している。かかる心境から童歌を生んだ。

夜坐擬俚言子守唄戯詞（『東桜集』附録）

栗喰法師、栗シリほ上ルうし、何ナセ辿ツテさうハ、疲草履れしぞ、阿笹谷の山越えて、川最上越えて、ど馬どにも乗ず、ぢ草履よぢよはいて、えっさらやいと来たそいな、疾れもしないでどうせうぞ、

栗雨くひ法師、栗ほ七タうし、今年ハほしの夜もようて、ばら餅ばら降す、照酒ようて、阿シ餅ももようて、ささよう

て、何（どうして）条（どうして）てさうハ、疲れしぞ、

くり喰法師、栗ほうし、ことしは栗も、豊年ぢや、三栗こことし、丹波栗、小栗シバヒシ菱栗、団々栗ヒヨウヒヨ、多度引タント、食アカれや、盆ころる里、盆ころる里、

（二）歌 仙

連歌から出発した俳諧は江戸時代に益々盛んになり、寛永から承応にかけて活動した松永貞徳によって一層盛上った。そして芭蕉によって完成した。以後、段々下火になり、安永天明の蕪村の俳諧復興の後は再び衰え、文化文政から天保にかけては歌調も低下したと言われている。僅かに一茶によって一道の光明をみるに至ったと言われている。然し、資料も散佚しておるので、正確な研究は尚、今後に俟たねばならぬと思う。況して僧侶歌人については特にその感を深くする。

良洗上人は俳句、和歌、文章すべてに文学的才能が優れた方のように思われる。素より私如き門外漢には価値の考証などできうべくもないが、上人の作品に触れて僧侶として教わる点が非常に多いのに気付いた。上人の作

品中には歌仙や連句が相当出てくる。それに「三日月の頃より待ちし今宵かな」「朝顔につるべとられて貰ひ水」——こうした個々の名句よりも、歌仙の如くとりどりの詩興を心で結び合うことは素晴らしい手法だと思ふ。この意味で、次に上人の歌仙を紹介してみよう。

(1) 歌仙 小気味能う（『一解集』西室編）天保十年刊

一具耆宿の安居をよろこび、岩城の旅に赴く朝

小気味能う若葉のそよぐ首途哉

尊阿

まづ袖の花を うかすさかづき

夷則

物事に馴た大工を呼よせて

一具

見かけに倚らぬ 内のとりひき

阿

御通りの済んで月さす番手桶

則

一兩日は ぐっとひやつく

具

ひよろひよろと花のやさしき種たばこ

阿

塩なめ地藏 願のようきく

則

物ごしで人の気前のわかる也

具

つれの内儀の はやき胸算

阿

尊阿十二句 夷則十二句 一具十二句

(2) 歌仙 日暮迄 （前に同じ）

日暮迄横にもならず初袷

野巢

若葉の風に しとる蘭薙

尊阿

桔槔 おもりの石を取かへて

一具

素直に酔し 酒の評する

尺葉

本圖の すむでも月の晴きらず

夷則

いつもの鴈の くつろいでなく

方居

露しぐれ はなしの菜に豆煎りて

阿

はやらぬ医者しほの門に 咳く

具

野巢、尊阿、一具、尺葉、夷則、方居各六句

(3) 歌仙 蓍かと（『へなたり集』尊阿編）天保十四年刊

蓍かとおもひもしたりほととぎす

一具

ねざめを薫る 雨の袖の花

尊阿

船の衆の 預物を 取に来て

具

通りいっばい 樋竹ひろげる

阿

すこすごと蔵の間にのこる月

具

こぼれた麦の 芽ばる菌塚

阿

手まはしに切籠どうろを張かへて

具

肥立もせぬに 孫みせにくる

阿

人ごみの中でめにつくはやり縞

具

瀬わけの吹て ちらす形代

阿

咲花に遠い徒弟もうち揃ひ

阿

立かけてある椽のぬれ桑

執筆

一具十七句 尊阿十八句 執筆一句

(4) 歌仙 麦畑の『東桜集』遜阿編 嘉永五年刊

宗師にいざなはれて、野外にあそぶをりからの余興

麦畑の うへを日中の 霞かな

瓦村

春の津出しに馬なかせゆく

一具

塀際に 枸杞茶のむしろ片よせて

遜阿

手ざいくものを 人に乞るる

村

いろ紙の笹にひらめく幕の月

具

ほほづきがらの たまる掃だめ

阿

蟬の飛つく袖をふり払ひ

村

くひそめまでは里方の世話

具

際前の日をくりあはす願ほどき

阿

庭の菖蒲を そへる進物

村

互村十二句 一具十二句 遜阿十二句

(5) 歌仙 雑『東桜集』『二解集』より

住むところ、行くところ必ず一人二人、時に五人十人、門弟なり友人、知友が知友を誘って集まって来た。きまつて句会が開かれ、連句ともなったようである。

堺虚空蔵

夜と日の堺ひの峰やはたる雁

遜阿

愛宕の森に 有明る月

三宝主良香

有耶無耶関

いつくともしら雲うつむ山ふかミ

上館林次貝淳

ありやなしやの関のふるみち

遜阿

緑峯亭主人

をりふしはゆれて日ひかり関ぬ窓の蔭

遜阿

盆にならやる 月のくさひら

亭主緑峯

最上川舟中

もかみ川ふかく契りていなふ手の

藤手高尚

のほり来ますを 今よりそまつ

遜阿

袖の浦

うちとけて逢ふ夜は袖のうらうへに

遜阿

かなしかりけきぬきぬの空

綾女

最上蟹沢は師石翁もおもし胞をさめし地なれば

臍の緒のかたみに摘ん雨の棉

遜阿

蝨もつるる 蛙のふる道

母来

(三) 職業合

良洗上人編の著書の中には、仏語、恋愛、人倫、人物、画賛、追善、無常、懷旧、釈教等、多々ある。その中で同人の読んだ職業合というのがある。一寸面白いと思うので左に挙げてみよう。——は判読しがたい。

出女 しくるるや客とらぬ夜の壁訴訟

仙台霞子

按摩 籟しほる按摩の笛の時雨かな

竹下

蕎麦売 新そはや月なき辻に更る声

三素

轎夫 駕舁の杖やすめてやさしかの声

菊鳥

牧人 牛——ハもとるや月の禁道

湖村

伯楽 手はつして馬鍼さかすや 露

布川

六部 天笠に日をさへぎるや秋の風

鷗山

面打 八手咲 窓や偽面うつ鑿の音

尊阿

||新刊||

梶村 昇 著

『法然のことば』(宗祖のことばシリーズ④)

B 6判 二三四頁(カルチャープックス)

定価 八〇〇円

(発売元)

〒102 東京都千代田区富士見二一六―九

雄山閣出版株式会社

||新刊||

金光寿郎 著

『杵のない世界』

B 5判 二五一頁

定価 一二〇〇円

(発売元)

〒102 東京都千代田区一番町九

柏 寿 社



念仏ひじり三國志

(五)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

鎌倉では將軍頼家が未だ健在であつた。

たしかに侍所の長官で頼家の利益代表でもあつた梶原景時が横死したことは、將軍の権力を半減させた。だが妻の実家である比企一族もあることだし、亡き頼朝の余光もあつて俄かに失脚とは思えなかつた。

それが、阿波ノ局は弟の千幡(実朝)をすでに將軍位を継ぐ人だ、と断定している。御台所に坊門家の娘をあてようと画策するのである。

「頼家將軍はいつ退位なされるんですか」

安樂房はズバリ訊いてみた。

「いつと日限までは断定出来ませぬが、近々のことでしよう」

阿波ノ局は表情を変えない。

「しかし、このような縁組を院が、いや通親卿がお許しにならぬはず」

念仏ひじりという世捨て人ではあつたが、宮廷の政治ポイントだけは擱んでゐるつもりだった。

坊門局の父信清は名門の当主というだけではなかつた。七条院領と呼ばれる広大な庄園領地の管理者でもあつた。

った。

七条院とは信清の姉殖子の妃名で彼女は高倉帝の中宮であつた。その腹に出来たのが後鳥羽上皇である。

現在京都の宮廷政權を支える財源は、この七条院領と、後白河法皇の私有財産で現在は丹後局と久我通親が支配している長溝堂領、それと八条女院領とである。

信清の娘が鎌倉へ嫁入ることは宮廷財産に武家が介入する権利を与えるにひとしい。

後鳥羽上皇が、長溝堂領をおさえている久我通親が許すはすがない、と安樂房は断定したのである。

「わかつております。しかし、この縁組は是非まとめあげませぬと……」

何やら使命観めいたものを阿波ノ局の口吻はふくんでいる。

「二位ノ禪尼さま(北条政子)のご意志でしょうか」

安樂房は、押してみる。

「それもございますが……とにかく坊門のお局さまに目どおりさせて下さいませ」

「とにかく此処でそのまま待つておられたらよろしい。

じきにお局さまがおいでになりますよ」

前号のあらすじ

安樂房連西が生仏たちに「六時礼讃」の節博士を急がせたのには理由があつた。完成した「六時礼讃」を後白河法皇の十三回忌法要の席で歌いあげ、天下の耳目を念仏一門に引きつけようというのである。今日は生仏を仁和寺御所の近辺にある茶屋に連れだし、法要の席で「六時礼讃」を歌うことになる女人たちと引合せた。この女人たちは皆、道助法親王の生母である坊門局に仕える女官である。この日、坊門局の参加があつた。夫である後鳥羽上皇のご乱行など、さながら畜生道の觀を呈する禁裏にいたたまれなくなつた坊門局は、美しいメロディの「六時礼讃」に魅了されていった。

そんな折、坊門局は安樂から阿波ノ局との面会を求められた。阿波ノ局は、北条政子の次男千幡君(將軍源頼家の弟で後の実朝)の乳母をつとめてきた女性である。

「えっ、此処に坊門のお局さまが？」

阿波ノ局は思わず茶屋の内部を見まわした。こんな雑白な場所にやんごとなき女人が現れるというのであろうか。

「そのかわりあなたも六時礼讃をやって頂きますよ」

安樂房は気軽に笑つた。

生仏は今更のように世の移り変りに驚きなくなる。一介の念仏ひじりが東西政治の枢機へ、いとも簡単に関与

してゆこうとする。六是礼讃を唱えている間に、天下を
ゆり動かす重大な密約が取り交わされるかも知れないの
である。

だがその宵、話は密約にまで進展はしなかった。

六時礼讃に現れた坊門局に、安楽房はあっさり阿波ノ
局を紹介した。兼ねて面会の意志が伝られていただけに
坊門局も親しげな笑顔で迎えた。しかし話題が妹の縁談
に及んだとき、さすがに坊門局の口は重くなった。

そのような重大事は、自分の口から軽々しく父信清に
取次ぐことは出来ない。現在の自分はすでに院（後鳥羽上
皇）の寵を失って半ば出家したような身分である。取次
いだとしても効果はないだろう、と婉曲にことわった。

生仏がいぶかしく思ったのは、紹介者の安楽房が沈黙
を守りとおしたことだった。阿波ノ局を支援する言葉は
全くなかった。

その夜の六時礼讃は朝にまで長引かなかった。坊門局
は女房たちと夜半に仁和寺御所へ引揚げていったし、阿
波ノ局もあらかじめ手配がしてあったのであろう。若い
従者二名が現れて彼らをともなう六波羅の宿所へ帰っ
ていった。

夜更けた道を、生仏は安楽房に手を引かれ広隆寺へ戻
ることにした。

「遵西どのは、あまりあの縁組に気が進まれぬようでし
たな」

「気が進むも進まぬもないが、あれはどうも阿波ノ局が
勝手にこしらえたことのようなだ」

「あれとは？」

「千幡君が將軍になるという話だ。坊門の姫君との縁組
がととのって初めて將軍となる土台が出来るのではない
だろうか」

「話の前後が逆になりますか」

「まあ、そんな成行きだな」

「阿波ノ局は千幡君の乳母。だから何としても將軍家に
押し上げて……」

「無論それもある。だがそれ以上に阿野一族が生き残る
道はそれしかないのではなからうか」

「阿野一族が生き残る……しかし阿波ノ局は二位ノ禪尼
の実の妹。夫の阿野全成どのは故頼朝公の弟ではありま
せぬか」

「さ、そこだ。鎌倉きっての名門、だからこそ身を危う

くするのだ」

「……」

「あれだけの名門となれば、ご家人たちがかつぎ上げるには恰好ではないか。故頼朝公のご恩誼にむくいるためにも弟公を盟主に頂いて、と徒党を組む大義名分が出来る。また北条家を買う者は阿波ノ局を楯にして結集し易い。現將軍を追いやって千幡君を立てる場合も乳母の阿波ノ局はだいじな存在だ。どこから眺めても利用し易い名門、ということになる」

「だから滅される……」

「うむ。いま二位ノ禪尼はご家人の氣持をまとめることが精一杯のはずだ。そのためには將軍家も除去するかも知れぬし、生家の北条氏とて滅ぼし兼ねない」

「北条氏もですか」

「だが、その前に先ず消すのは名門中の名門、乙若どのの一族であろう」

「すると阿波ノ局は千幡君を將軍家に盛り立てることに賭けているわけですね」

「わしはそう思う。それ以外に生きる道はない」

実朝を將軍に擁立するための基礎事実として坊門の姫

君と縁組を結ばせる。現將軍頼家の閥族である比企氏とは身分家柄が問題にならない。さらに七条院領との関連においても京都の宮廷政權へ太いパイプを繋索させることになる。

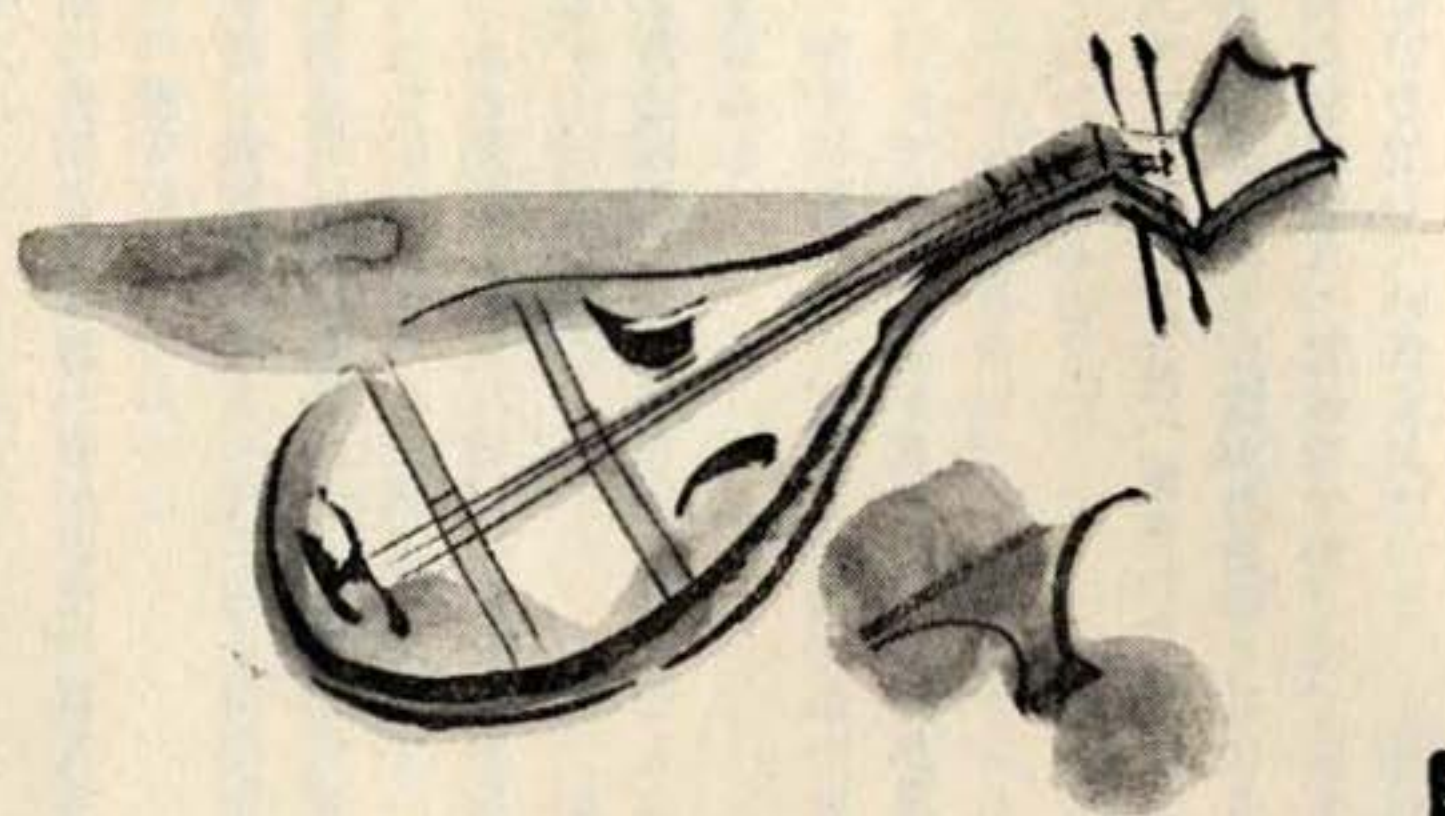
阿波ノ局はこれだけにすがって縁組をまとめ、実朝を將軍に擁立し、わが阿野一族が生き残ろう、と必死なのだ。

安楽房のこの読みは正確過ぎるほどに的中していた。やがて、坊門局の妹は將軍実朝の御台所となって鎌倉へ下ってゆくわけであるが、それまでになお三年の時日が必要であった。この建仁二年の時点、阿波ノ局の縁組画策は全くの自己保身から発した独走であったのである。

独走だった証拠に、この年が明けると阿波全成は謀叛を理由に突如として逮捕され常陸へ流される。そして追手はさらに迫って殺してしまうのである。その子も京都で処刑される。

不思議なのは唯一人阿波ノ局のみ許されるのである。権力者北条政子の実妹、助命の理由はそれだけだったであらうか。

＜琵琶＞



広隆寺の僧房に寝起きする生仏は、安樂房の依頼による六時礼讃の節博士(曲付け)の完成に音覚を集中するが、たわら、長年にわたって鐘愛してきた琵琶の修練も怠らなかつた。

琵琶の修練とは、新しい話材を仕入れてそれに曲節を付けて弾き語るのである。新しい話材の殆んどは盛者必衰の無常相をそのまま地でいった平家に関するものが多かつた。生仏自身が盛んな日の平家の人々を知っていただけに、その語り口は聞く者の胸を搏つた。

後世の史家によって「平家物語」が盲目の琵琶法師生仏から流通した、と断定された所以である。

琵琶物語は永禄年間、琉球島から新しい楽器の流入によってさらに大衆化した。二絃の蛇皮である。泉水堺の盲人法師がこれに一絃を加えて三味線とした。三味線の音曲は物語そのものも軽妙動的なものにし、浄瑠璃へと進化してゆくのである。

生仏のもとへは何人も弟子が通つてきた。琵琶の手

習いである。

そのなかに善観という若い僧がいた。盲人ではなかった。高尾の神護寺の堂僧であった。

この善観が、兼好法師によって六時礼讃の完成者と言われた善観房と同一人であるかどうかは不明である。

とにかく生仏について熱心に琵琶を学んでいた。

ある日、ふと琵琶をおいた折、生仏は何気なく善観に問いかけた。

「神護寺と言えば荒法師はどうなったのでしょうか。消息を聞きませぬか」

生仏は、弟子に対しても丁寧な言葉づかいをする習慣があった。盲人で相手の姿が見えず、敬語が常用語になつてしまったのかも知れない。

「荒法師とおっしゃると？」

「文覚上人です。たしか佐渡へ流されたと聞きましたが」

「ああ、あのお上人なら佐渡からお帰りになりました」

「何っ流罪が赦免になったのですか。で、いま何処に」

「神護寺にいらっしゃいますよ」

若い善観は荒法師文覚を知らない。文覚が流罪になつたあと、神護寺へはいってきたのであろう。

「一度、お会いしたいものです」

何とか面接の手段を講じて欲しい、と生仏は頼みこんだ。部屋住みの善観には即答出来兼ねたが、とにかく神護寺へ戻って長老に相談してみようということになった。

この面接は以外に早く実現した。数日後、善観は広隆寺へやってきて、

「今日の午後ならお会いしてもよろしいとのこと」と、文覚の意をつたえた。

生仏が文覚に面接を求める意図に政治上のふくみは全然ない。都と鎌倉との間を目まぐるしく往き来して、政治家たちを悩ました破乱の荒法師文覚が北辺の孤島佐渡へ流されて、どんな心境、どんな生活を送ったのか、それが知りたかっただけである。琵琶物語に恰好な素材になると思つた。

政治上の関心は持たぬ、とは言つても文覚の流罪、そして今度の赦免ほど不可解な話はない。

佐渡への流罪が決定したのは正治元年（一一九九）の三月である。理由は皇位継承にからんで暗躍し、後鳥羽上皇の怒りに触れて、ということになっている。

その前年の正月、後鳥羽天皇は帝位を退いて院へ入っ

た。世嗣が長子為仁親王であることは衆目の一致するところだった。

後鳥羽帝は在位十六年に及んでいる。宮廷内における独裁体制は固め終った。固め終ったからこそ上皇となつたのである。為仁親王に皇位継承のライバルはいないはずだった。

ところが文覚たちが守貞親王をかついで暗躍したというのである。守貞親王とは高倉帝の長子で後鳥羽帝には兄にあたる人だ。後鳥羽帝即位の十六年昔ならいざ知らず、すでに後高倉院として隠居の身でいるのだ。政治の第一線からは完全に姿をかき消していた。

まして為仁親王の背後には宮廷の権力者久我通親がいるのである。通親は藤原範子と再婚したが、範子には先夫との間に右子という娘がいた。つまり連れ子をして通親に嫁したわけだ。

通親はこの右子を後鳥羽の後宮へ入れた。承明門院と呼ばれた。彼女はじきに皇胤を宿した。生まれたのが為仁親王だ。

同じ時期、九条兼実も娘の任子（宜秋門院）を後宮へ入れ子供が生まれたが、此方は女兒であった。

皇太子の外祖父となった久我通親はいよいよ権勢を張って、ライバル九条兼実を蹴落した。為仁親王は誰に妨げられることもなく帝位に就いた。土御門天皇である。架空事件にも似た守貞親王擁立の首謀者として文覚は佐渡へ流されたのである。

では、なぜそれほど文覚は後鳥羽上皇や久我通親から忌避されたのであろうか。凶星を射るような理由は見あたらなかった。

高尾の峰には粉雪が舞っていた。神護寺へ登る山路は難儀をきわめた。生仏は善観に手をひかれ、面を墨染めの袖でおおい、あえぎあえぎ登った。

「わしに会いたいという琵琶法師とはおぬしか」
山門を過ぎたところで、いきなり大声をかけられた。
「文覚さまですか」

生仏は善観にたずねた。

「はい。この雪の日に文覚さまは裸になられ、地面へお坐りになっていらっしゃるんです」

状況を説明してくれた。

「荒行でな。こうでもしないと身体が参る。佐渡の雪はこんなものではない。かの島で冬を越すには荒行し

かないのじゃ」

生仏が問う前から流人生活の一端を文覚は覗かせてくれたわけだった。

「そんな雪上にお坐りになって、何をお念じになるのですか」

「何を念ずるか、だと。文覚はまともな坊主ではない。

仏を念じたりはしない。佐渡におる間も、唯一つの言葉だけを声一杯はりあげて叫び続けたものじゃ」

「どんな言葉を？」

「それが、聞きたいか」

「はい」

「よく聞くがいい……文覚は死なぬぞ。あの帝をこの雪の佐渡へ迎えまいらすまでは絶対に死なぬぞ」

「この二年間、そればかりを」

「そうとも」

「帝に呪いをおかけになったのですね」

「あの帝は必ず遠島流罪、遠い地獄の島で朽ち果てるお方じゃ」

「なぜでしょうか」

「お慰さみで臣下の運命をもてあそぶお方だからじゃ。

だから当然、いまにご自身がもてあそばれる」

「しかし、このたびはご赦免になって、都へ帰ることがお出来になったではありませんか」

「なあに、これとてもお慰さみよ。じきにまた文覚を何処ぞへ遠島するにきまっておる」

いやに断定的なものの言い方をする文覚であった。

それでも雪の境内での坐りこみをやめ、文覚は生仏を神護寺の書院へ招じ入れてくれた。

席は移ったが、文覚の後鳥羽帝への呪論はやまなかった。

三

文覚は、後鳥羽上皇という人間像をきわめて近代的な感覚で分析してみせた。それによると……。

後鳥羽の内面には古代武人の蛮勇と、近代詩人の浪漫性とが奇妙に密着して共存している、というのである。無論こんな近代の表現は用いなかったが。

文覚は建久九年の正月ごろから、しばしば御所へ招かれた。後鳥羽帝はのめりこむようにして政談、法話を文

覺に語りかけた。そして文覺のなかに剛直粗暴な性格を発見すると、有頂天になってこれを賞讃し、溺愛した。「齒が浮くような美辭麗句で、わしを褒めちぎるのじゃ。近臣にも夜さえ明ければ文覺が、文覺であつたそんな」賞讃、溺愛が、やがてさめる。さめて疎外にしてくるなら未だいい。

以前にも増して粘つくくからみついてくる。その感情は陰湿な嫉妬で塗りたくられていた。文覺の美德がたまらなく、ねたましいのである。彼を独占してしまいたい。独占するためには罪におとし入れることだ。重罪犯として遠い島へ流し去ってしまうことだった。

文覺が佐渡に在島中、都から便りがあつたと言え、それは必ず後鳥羽上皇からの文であり、歌であつた。

「まるで恋しい男に、想いの限りを傾けて書き綴つたというようなものじゃつたな」

「どのような歌だったのですか」

生仏は耳をとき澄ました。記憶にとどめておこうと待機した。

「そんなもの、いちいちおぼえておられるか。読むたびにすぐ燃やして、その炎で冷えた股倉をアブつたものじゃ」

文覺らしい受け止め方であつた。

愛する者を悲境のどん底へ叩き落とし、そこで苦しむ姿を思いえがき、帝自身も悲嘆のどん底へおちこんで、綿と思慕を書簡や詩歌に托する、というのである。

酷薄な状況設定をおこない、その世界へわが身を投げこんで、被害者と一心同体になつて嘆き悲しむ。それが後鳥羽帝の浪漫性なのだ。と文覺は言いたげである。

しかし、文覺の粗野な表現がどこまで生仏を説得したかは疑問である。近代感覚で分析した、とは書いたが、生仏にはすべて「異常」としか受け止められなかつたかも知れない。

後鳥羽帝も「異常」なら、文覺自身に「異常」に映じてくる。

「御所へは参内されましたか」

「それはゆかずばなるまい。いちおう大御心とやらで赦免になった身じゃからのう」

「上皇は如何でしたか」

「いきなりわしをじゃな、抱かんばかりにして文覺よ、よくぞ生きて帰ってくれた。余はそちが佐渡にある間、ひと夜とて安らかに眠つたことはないぞ。もう二度、余

のそばを離れんでくれ。これじゃよ」

「有難いお言葉ではありませんか」

「何の何の。いまに見ている。あんなお言葉とはまるで裏腹なお仕打ちをなされる」

「そのお仕打ちとは」

「もう一度、島流しじゃなあ。こんどは佐渡よりもっとひどい島へ追いやられるぞ。さしづめ隠岐じゃ。」

「隠岐へ」

「わしはまた呪いつづけてくれるわ。必ずこの隠岐へ帝を迎え奉りますぞ、とな」

文覚の予感、というよりも見通しは、ぶ気味なほどに的中する。

文覚が佐渡へ流されたのは正治元年（一一九九）の三月である。赦免は建仁二年（一二〇二）の十二月二十五日。ところが、わずか一カ月余り都にただけで翌年の二月初めには再び遠島に遇うのである。

ただし、隠岐島ではなかった。九州の対馬であった。対馬まで到着出来たかどうか。とにかく文覚はその年の七月に没してしまふ。その死も自殺だったらしい。

文覚は死に臨んで、侍者に首を斬り落して都へ持ち帰

れ、と命ずる。高屋神護寺境内で最も高い樹木に吊るせ、とも言ったそうだ。

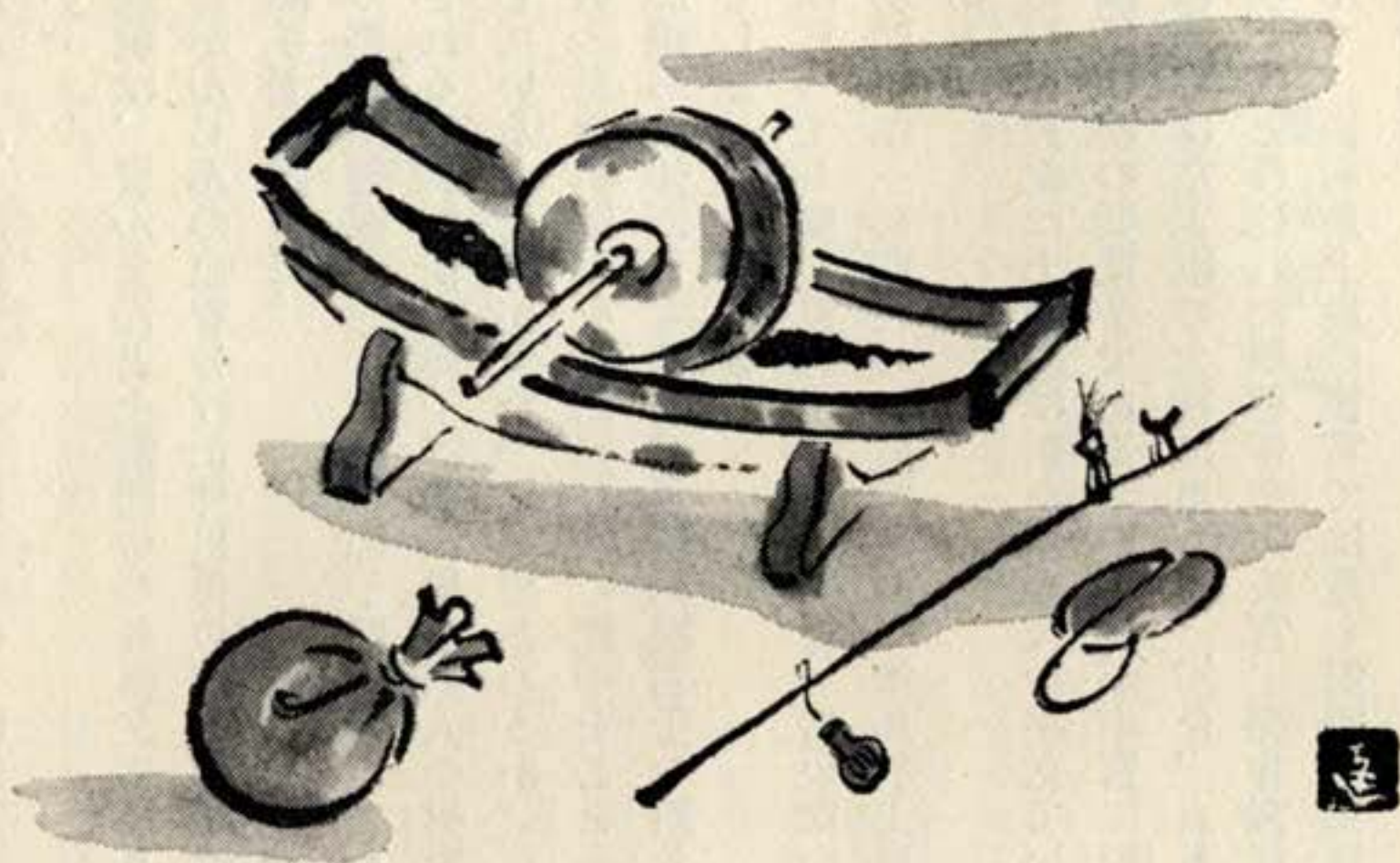
神護寺を愛惜したからではない。そこからだと都が一望のうちにおさめることが出来る。王城を睨みつけて、後鳥羽上皇へ呪いをかけ続けるつもりだったのであろう。

琵琶法師の生仏は、「平家物語」の語り口で文覚の呪いを強調する。承久の乱で後鳥羽上皇がついに隠岐へ遠島された運命を、この呪いと結びつけたのである。

とにかく後鳥羽上皇ほど性格把握のむずかしい人も珍しい。九条兼実から「大天狗」と呼ばれた後白河法皇も複雑多岐にわたる人格だが、それ以上ではないだろうか。後白河法皇の手練手管には、それでも政治的テクニクが読み取れる。後鳥羽上皇のそれは、つねに陰惨な直接行動をとまなう。

文覚が佐渡から突如として赦免になった理由として、内大臣久我通親の急死をあげる史家が多い。なるほど正治元年の流罪を、頼朝の死とともに鎌倉政権の内部へ手を伸ばした通親と梶原景時の握手から生じた「邪魔物は取り除け」式の処置と原因付ければ因果関係はいちおう成立つ。梶原は昔から大の文覚嫌いだったからである。

＜薬研と薬袋と秤＞



だが、せつかく赦免になった文覚を、わずか一カ月余で再び鎮西の地へ島流しにしたのはなぜだろうか。前の因果関係とは完全に系脈を絶ち切ってしまうではないか。わずか一カ月余という時間が厄介である。

後鳥羽上皇の「異常」性格から発したと考えぬわけにはいかぬ。それあるからこそ文覚の強烈な呪いが裏付けられてくる。

上皇の「異常」は、政治上の無二の同志久我通親の身辺にも伸びていった。

再婚の妻範子（後鳥羽上皇の乳母）の連れ子承明門院が生んだ為仁親王が四才で土御門天皇となって即位した。通親の得意は絶頂に達した。内大臣に輔任したばかりか、後鳥羽上皇の身辺をすべて取りしきる「院別当」までも兼ねた。

権力の頂上に立った通親は五十四才。まさに働き盛りであった。ところが突如としてその建仁二年十月に急死するのである。

その死因にはミステリイが匂ってくる。一日も病まないうで頓死だった。当時の頓死は毒殺と同義語にもなり兼ねない。もちろん卒中や心筋硬塞、あるいは腹上死もある

ったであろうが、解剖学が未発達な時代では病因を突きとめ難い。

久我通親は、まんまんと土御門帝の外祖父になりおおせたが、かんじんの血を分けた外祖母の藤原範子はその栄光に浴さずに死んだ。

彼らの再婚は通親が三十八才、範子は三十三才ぐらいと推定される。再婚後、範子は矢次早に三人の男児を産み落としている。それがたたったのであろうか。

妻を失った通親は、その絶倫な性の魔手をこともあろうにわが娘へと伸ばしてゆく。承明門院右子を新しい愛人としてしまったのである。

娘とは言っても妻の連れ子で血はかよっていない。しかし承明門院は土御門帝の母后であり、後鳥羽上皇の中宮でもある。

臆面もない通親は上皇には新たな愛人を与えている。左大臣藤原範季の妻重子である。いや娘が中宮に栄達したために範季は左大臣の大役にありついていた、とも言える。修明門院と呼ばれた順徳帝や六条宮、梶井宮など男児を生んで、後羽鳥上皇の後宮では最も安定した地位を得た女性である。

わが娘、承明門院との仲が爛熟し、名誉とセックスを二つながらに満喫しているさなか、久我通親は頓死した。未だ五十四才だ。腹上死とは思えない。卒中や心筋硬塞だとしても二、三日は生きてもよいのではなからうか。

証拠はないが毒殺の線が考えられる。

どんな方法が用いられたのであろうか。

例えば、熱帯夜を彩るスリラードラマ風に構成してみるとしたら、こうなるであらう。

その夜、久しく遠のいていた後鳥羽上皇が何の前ぶれもなく承明門院の御所へ渡って来られた。愛人で父である久我通親は不在であった。

上皇は承明門院を強く愛撫し、彼女がエクスタシーに達したあと、しみじみと語り出した。

「範子のことか思い出されてならない。余が幼い日から抱いてくれたいといい人だ。それにしてもあれほど不幸な女性もいないであらう。お前を生んだそのころ、範子はお前の父親を限りなく愛しぬいていたはずだ」

藤原範子の前夫で承明門院の父親は、平氏の能円であった。平清盛の妻時子の実弟だ。平氏の都落ちが、この夫婦、父娘を生き別れにさせてしまった。（つづく）

二 編集後記 二

○易の言葉に、「天雷无妄(てんらいぶもう)」
ということがある。「无妄」とは、妄(な)
す无(な)し、と読み、人間の欲望や作為的
な働きのない自然な姿のあるがままの状態
のことをいう。——今、突然に、「あなた
の運勢は、まずこの天雷无妄ということ
心得て、日々生活しなければならぬ」と
易をみる人に断じられて、私はハタと困惑
してしまった。もとより、私の人生は根無
し草、依り処のない浮き草のようなもの。

親もなし妻なし子なし板木なし

金もなければ死にたくもなし

と詠んだ、江戸中期の経世学者林子平こ
と、かの六無斎先生ほどでもないが、まず
はこの歌の心境に似たようなもの。あたか
も宿無し野良犬の素浪人のような私でさ
え、「妄す无し」という境地の至難さには
気付く。かりにも、人生という積極的な世
渡りを営む以上、人為的な障りのない心身

を保ち続けることができようか。宮本武蔵
は『五輪書』八空の巻Vの中で、「武士の
おこなふ道、少もくからず、心のまよふ
所なく、朝々時々におこたらず、心意二つ
の心をみがき、観見二つの眼をとぎ、少も
くもりなく、まよひの雲の晴たる所こそ、
実の空としるべき也」と剣の修業から体得
した真理を説き、さらに「其心をしつて、
直なる所を本とし、実の心を道として、
……空を道とし、道を空と見る所也」と結ん
でいる。いやはや、無明の闇に没し煩惱の
灯を燃やしている私などには、悟れる人の
はるか遠い言葉ではあるが、戯れ言とは受
け止められない。現に、易者の眼は、暗い
灯影の中で、私の過ぎ来してきた無明長夜
を凝視し、鳥瞰している。……すでに晩秋
の風に、寒気すら感じる十一月の夜半、私
はもう一度、「天雷无妄」という言葉を反
芻した。

霜月や日ごとにととき菊畑 虚子
篝火に十一月の青もみぢ 青柳

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四巻 十一月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十三年十月二十五日 印刷
昭和五十三年十一月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八―八二―一八七番

ぶつ じ ねん 念 持 仏 =新発売=



○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。中央に阿弥陀如来、左右に高祖善導大師、宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。この念持仏は、中央が割れない特殊な鏡になっているのが特徴です。日々夜々、心の汚れを鏡の面に写して反省しながら、浄土の信仰を深めて下さい。どうか多くの人々の魂棚におまつりしていただくことを切望します。

定価 一体 2,500 円 (五十体以上は一割引)

送料 一体 200 円 (五十体以上は無料)

●寸法 21.8cm × 14cm 3 枚折・実用新案登録済＝番号53-044860号

(発売元) 〒153
 東京都目黒区目黒 4-16-12

株式会社 泰 童
 TEL (03) 711-6006

(取扱い) 〒102
 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法然上人鑽仰会
 振替(東京)8-82187番